

小田原城下・日向屋敷跡第Ⅰ地点（第2次） ひゅうがやしきあと

1. はじめに

今回の発掘調査は、小田原駅東口お城通り地区再開発事業に伴って実施しているものです。調査は、南側の元藏堀第Ⅱ地点（前年度調査済）と、北側の日向屋敷跡第Ⅰ地点の2箇所で行っています。今回ご説明する日向屋敷跡第Ⅰ地点では、江戸時代後期の武家屋敷跡や戦国時代の屋敷跡などが見つかっています。

2. 遺跡の立地とこれまでの調査

本調査地点は小田原市栄町一丁目他に所在します。地勢的には八幡山丘陵の南西側の張出部に位置しており、周辺では丘陵の山裾を削って造られた三の丸元藏堀などが見つかっています。



第1図 調査位置図

日向屋敷は元蔵堀の北側に展開する江戸時代の武家屋敷地になります。遺跡名の「日向」は、慶長 19 年（1614）、小田原城主大久保忠隣おおくぼただちかが改易となり、その夫人である日向御前が閑居した屋敷がこの地にあったという伝承に由来しています。江戸時代の絵図で確認すると、一貫して武家の屋敷地であったことが分かります。

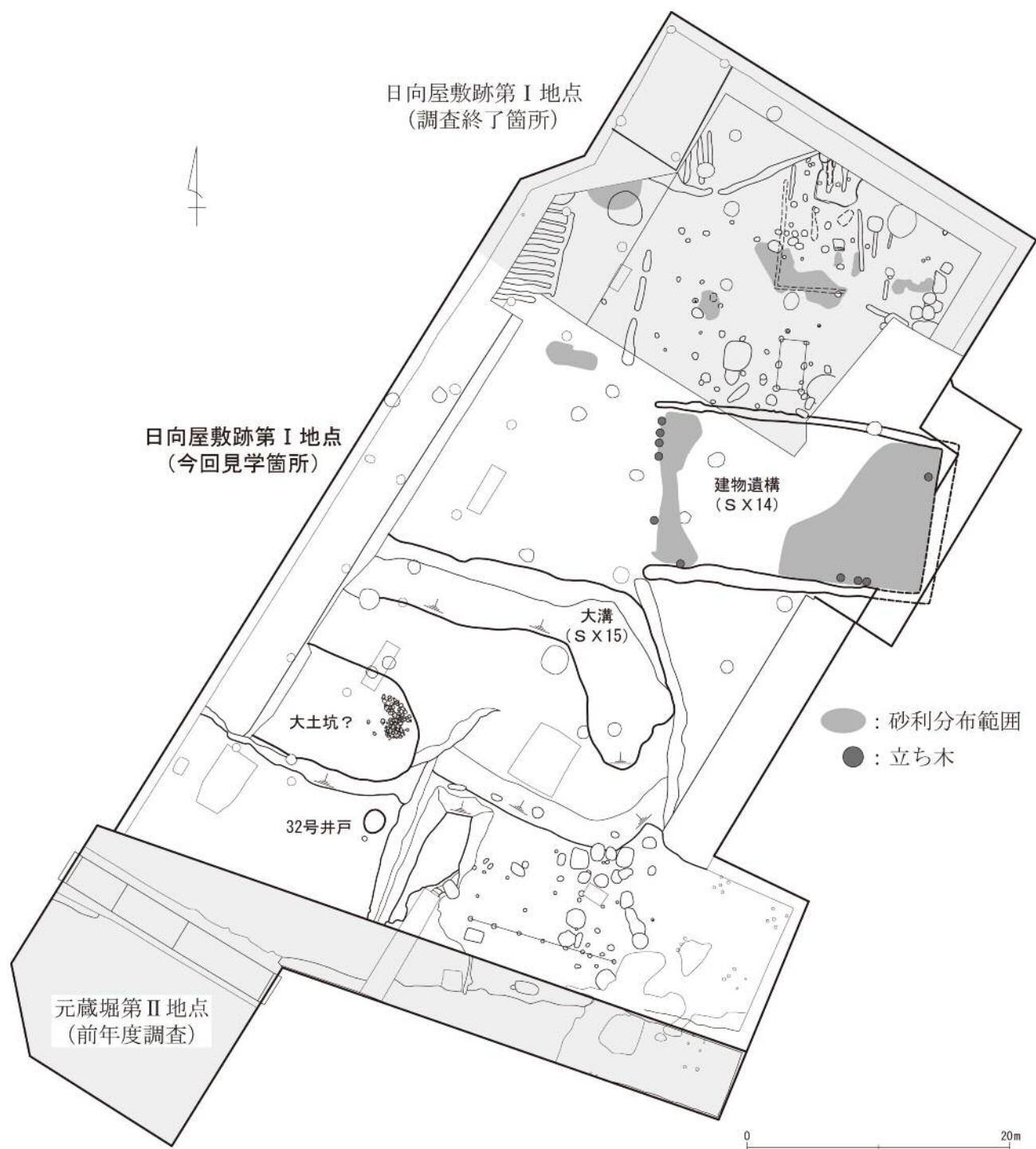
本調査地点では、平成 28 年 12 月に 18 世紀前半～中頃の遺構群（主に石組井戸や素掘りの井戸、礎石、土坑、ピットなど）を対象とした見学会を行いました。現在はさらに下層の戦国時代の遺構（主に大溝、建物遺構、素掘り井戸、うね畝状遺構など）を調査しています。これらの遺構からは、16 世紀中頃～後半の輸入磁器・国産陶器・かわらけ類を中心とした遺物が出土しており、小田原北条氏の時代に属する遺構群と考えられます。

3. 今年度の調査成果

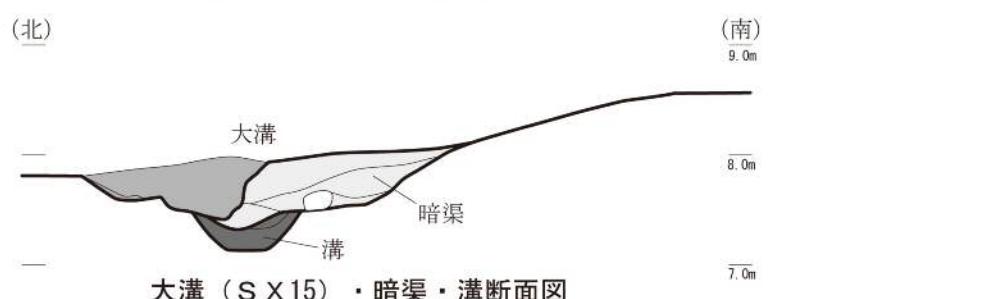
今回の調査では、江戸時代前期（17 世紀中～後）の遺構面の下に厚さ約 1.5 m におよぶ埋土層を確認しました。この埋土はロームや黒色スコリアを主体としたブロック土で構成されており、16 世紀代の国産陶器および土師器・縄文土器の小片を僅かに含むほかは、遺物が入っていません。そして、南側（元蔵堀側）から北に向かって次々と土が投げ込まれている様子を確認できました。これらのことから、この埋土層は短期間に造成された可能性が高く、当該期における大規模な土地改変の痕跡と判断されます。そしてこの埋土層を除去したところ、戦国時代の大溝や建物遺構、素掘井戸、畝状遺構などの遺構群を発見しました。

このうち、大溝は幅約 6 m で、調査区内をやや不整形に周旋しゅううせんしています。その縁には幅約 1 m、深さ 60 cm 程度の溝が弧状に掘り込まれていました。大溝が構築される前の段階では、ほぼ同じ場所で玉石造りの暗渠あんきょや東西方向の溝があったことを確認しましたが、いずれの遺構も小田原城から城下へと下る自然の土地傾斜を利用しながら構築されていました。遺物は主に暗渠を埋め戻した土から出土していますが、瀬戸美濃大窯 1～2 期の擂鉢すりばちや小田原 IIa 新段階のロクロ成形かわらけなどが見つかっており、少なくとも 16 世紀半ばには暗渠が埋められ、大溝が構築されていったものと考えられます。

大溝で仕切られた内側の平場には、大土坑のような掘り込みを確認できます。覆土の上層では前述の埋土層が堆積していましたが、下層では砂や粘質土、有機物などを確認できたことから、開口時には帶水してい



日向屋敷跡第I地点遺構全体図





建物遺構（SX14）と大溝（SX15）全景（西から）



32号井戸遺物出土状況（北から）

※共伴している遺物は瀬戸美濃大窯の水注

た可能性があります。大溝とあわせると一見曲輪状にも見えますが、詳細は不明です。

建物遺構は周囲が溝で方形に区画されており、縁には縁石と立ち木が並んでいます。四隅には玉砂利が厚く敷かれていますが、中央部は不整形な空閑地が拡がっています。建物の性格は不明ですが、通常のものとは性格を異にする建物・施設があった可能性が考えられます。

そのほか、大溝の南側上段では素掘りの井戸が見つかっています。この井戸の覆土からは中国景德鎮窯で焼かれた白磁菊皿の完形品が9枚（それぞれ4枚、5枚に重ねられた状態で）出土しました。

以上、遺構の性格を判断するのが難しい遺跡ではありますが、大規模な造成土の下から戦国時代の遺構がまとまって見つかったことが今回の大きな成果と考えられます。



日向屋敷南半部全景（江戸時代後期・北から）

**小田原城下・日向屋敷跡第Ⅰ地点（第2次）
発掘調査見学会資料**

平成30年（2018）2月3日（土）

小田原市文化部文化財課・都市計画課
玉川文化財研究所